

# 健康プラザ



## 「RSウイルス感染症」

医療法人将優会 クリニックうしたに  
理事長・院長 牛谷義秀

RSウイルス感染症とは、RSウイルスというウイルスによる呼吸器の感染症です。日本では11月頃から翌年の1月にかけて、おもに冬の季節に流行します。乳幼児の肺炎の約50%、細気管支炎の50~90%を占めると言われており、小さな子どもがかかると、呼吸困難を起こすことがあり、注意が必要です。また、一度感染しただけでは感染を防ぐ免疫が不十分なため、何度も繰り返し発症します。このRSウイルス感染症は特別な治療法がないので、感染する前に予防することが極めて重要です。



RSウイルスは風邪ウイルスの一種ですが、インフルエンザに比べるとあまり知られていないウイルスで、病院でも風邪だと診断されがちです。2歳までに、ほとんどすべての子供が感染すると言われるほど感染力が強いウイルスです。また1歳未満の乳児や、特に肺などの呼吸器や心臓に病気をもつ乳幼児や免疫不全のある子供は重症化しやすいと考えられており、また乳幼児突然死症候群の原因の一つとも考えられており、十分な注意が必要です。

### 1. RSウイルスとは？

RSウイルス (Respiratory Syncytial Virus) は、発熱、咳、鼻水、咽頭痛、頭痛、倦怠感<sup>けんたい</sup>など、いわゆる風邪に似た「RSウイルス感染症」と呼ばれる症状を引き起こします。

小さな子どもの間で冬の季節に流行するウイルス感染症には、インフルエンザウイルス、ロタウイルス、RSウイルスの3種類があります。インフルエンザウイルスに対しては多くの大人の方が関心を持っていることでしょう。これに対して、RSウイルスはその存在を認識している人も少なく、よく知らないと答える人がほとんどです。しかし、RSウイルスはインフルエンザウイルスやロタウイルスに比べて、感染する子供が多いばかりか、重症化しやすいウイルスです。

新生児のうち50~70%以上が罹患し、その1/3が肺炎や細気管支炎などを引き起こすという報告もあります。何度もかかりながら、2歳までにほぼ100%の乳幼児が一度は罹患する呼吸器の感染症で、しかも3歳までにほとんどすべての小児が免疫を獲得します。

#### (1) RSウイルスの感染経路

ウイルスを含むしぶきを含むくしゃみや咳<sup>せき</sup>などに含まれて空中に飛散して感染<sup>ひまつ</sup>（飛沫感染）したり、手や指を介して感染（接触感染）します。ウイルスが皮膚や服、おもちゃなどに付着すると感染力を持ったまま4~7時間生存するとされるなど、感染力は非常に強く、目、鼻、口などの粘膜から体内にウイルスが侵入し、感染を起こします。

## (2) 潜伏期間（感染してから症状が出るまでの期間）

潜伏期間は2～8日、平均的には4～6日とされています。

## (3) 感染期間

ウイルスが体外へ排泄されるのに必要な期間は7～21日と長いため、症状が治まっても長期間にわたって多くの人に感染を広げてしまう恐れがあると言えます。

## 2. RSウイルスはなぜ怖い

RSウイルスがなぜ怖いかと考えられている大きな理由として、①感染力が強いこと、②麻疹のような永久抗体をもたないこと（結果的に感染を繰り返すこと）、そして③有効な治療薬がないという3項目を挙げることができます。大人も感染しますが、感染しても大人の場合は鼻風邪程度で済んでしまうことが多く、気づかないうちに免疫を獲得していない幼児に感染させ、重症化させてしまう危険があります。

初期の症状は鼻水や鼻づまりに始まり、喘鳴（呼吸する時に聞かれるゼーゼーという音）や発熱などの症状が見られることがあります。多くは1～2週間で治ります。インフルエンザに見られるような急激な熱発や咳などが見られることは少ないため見逃されてしまいがちですが、気管支炎や肺炎などを引き起こし、命にかかわる症状に進行する場合があります。

このように感染力が非常に強く、嚴重な注意が必要なウイルスであるにも関わらず、有効な治療薬がほとんどないという現状をしっかりと認識する必要があります。

すべての患者の1～3%が重症化して入院治療が必要となるほか、心臓や肺に病気をもつ小児は重症化しやすいと報告されています。

## 3. 検査と診断

冬の季節に乳幼児が鼻汁、咳に引き続いて喘鳴を発症した場合には、その30～40%がRSウイルス感染症によると言われています。その際、RSウイルスによる感染症にかかっているかどうか診断するのに、ちょうどインフルエンザ検査のように、鼻に綿棒を入れてこすり、その綿棒を試薬を使ってRSウイルスを検出して行います。結果が出るまで、約30分程かかります。

また、細気管支炎や肺炎の診断は、胸部X線で行います。また、血液検査でRSウイルスに対する抗体検査を行い、感染の有無を確認することもあります。結果が出るまでに数日かかります。

## 4. 治療

RSウイルスに感染したことが確認できても、残念ながらインフルエンザのような特効薬はなく、対症療法（症状に対する治療）が主体になります。すなわち、水分補給・睡眠・栄養・保温が重要であり、食欲がなく脱水が心配な場合は点滴をしたり、体力を消耗してしまいがちな熱発には、アセトアミノフェン（カロナール）などの解熱薬を使います。咳に対しては咳止め、喘鳴を伴う場合には痰を切りやすくする去痰剤や気管支拡張薬などを用います。また、肺炎や細気管支炎などの合併症が疑われる場合は抗生剤を使用します。

呼吸状態が悪くなると、人工呼吸器をつけて、呼吸を助けてあげる必要があります。特に、早産児や心臓に病気を持っている子どもの場合は重症化しやすいので、予防が大切となります。

## 5. 予防

冬の季節に、兄弟姉妹が風邪を引いている時は、小さな子どもには特に注意が必要です。まずは家族全員でうがい・手洗いをしましょう。咳やくしゃみをする時は、口と鼻をハンカチやティ

ツシュペーパーなどで覆<sup>おお</sup>うなど、咳エチケットを守って周りの方への感染防止をこころがけてください。そして、風邪をひいた人との接触を避けます。特に1歳以下の乳児にどうやって感染させないようにするかが重要なポイントです。また、一度かかったら、人の出入りが多い場所や保育所の利用を避け、また咳症状を悪化させ、喘鳴を起こしてしまいがちなタバコの煙に触れない環境を作<sup>つく</sup>ってあげることが大切です。

RSウイルスの予防のために、パリビズマブ(シナジス)という免疫グロブリンが使われています。しかしながら、これは非常に高価な薬で、3kgの赤ちゃんで1回約8万円弱かかります。RSウイルス感染症が流行する前に、1ヶ月毎に5回筋肉に注射します。

## 6. まとめ

「呼吸が速い」、「息苦しそうな呼吸をしている」、「肩や全身を使って息をしている」、「顔色がすぐれない」などの症状が見られた場合には、かかりつけ医へ相談し、早めに受診しましょう。先天的に心臓疾患や肺の病気をもつ小児の場合などは、あらかじめかかりつけ医に相談し、感染予防やRSウイルス感染症にかかった場合の対応などについて助言を受けておきましょう。

